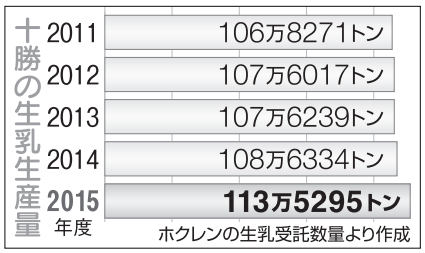
生産・統計

十勝生乳　最高113万トン　ホクレン15年度受託

2016年4月2日

十勝の生乳生産量の目安となるホクレン帯広支所の2015年度生乳受託数量が前年度4.5％増の113万5295トンに上り、５年連続で過去最高を更新した。酪農大規模化で牛の数が増えていることや、良質な飼料が確保でき１頭当たりの乳量が伸びたことが要因とみられる。

大規模化進む



生乳は、飲用牛乳やバター、脱脂粉乳、チーズなどの乳製品の原料。道内はほぼホクレンが一元集荷して、各乳業メーカーに販売しており、ホクレン帯広支所の受託数量が十勝の生産量に近い。

15年度にホクレン以外のＭＭＪ（ミルクマーケットジャパン、群馬）に出荷する新たな酪農家もいたため、十勝全体の生乳生産量はさらに多いとみられる。全国的には酪農の離農が多く、離農した分を大規模農家が補う構造が崩れて生乳生産量が減少傾向にある。そんな中での十勝の生乳増産は全国的にも注目されそうだ。

十勝の全24ＪＡのうち20ＪＡが前年度を上回った。乳量が多い順にＪＡ十勝清水町が前年度比5.3％増の11万9142トン、ＪＡ鹿追町が同5.7％増の10万8025トン、ＪＡ上士幌町が同10.4％増の10万425トンと３ＪＡが10万トンを突破した。

伸び率が高かったのはＪＡ上士幌町の10.4％増のほか、ＪＡおとふけが9.4％増、ＪＡ木野が8.5％だった。

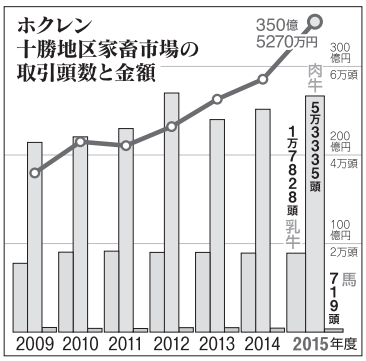
過去最高を更新したことについて同支所酪農課は「大規模経営の法人が新規に立ち上がっていることや、既存法人の増頭、個体（１頭当たり）の乳量の増加がある」とする。15年度はうるう年だったが、１日分を減らした、うるう年修正の数値でも前年度比4.2％増を記録し過去最高を更新した。

ホクレン十勝家畜取引　15年度　過去最高350億円

2016年5月10日

ホクレン十勝地区家畜市場（音更町）の2015年度取扱高は、前年度比22.7％増の350億5270万円となった。４年連続の過去最高更新で、初の300億円台に達した。肉牛、乳牛ともに府県の生産基盤が弱まる中で十勝、道内産の引き合いは強まっており、年間を通した高値取引の継続が後押しした。

全畜種で単価上昇



十勝市場は管内産を中心に家畜を取引。肉牛と乳牛は毎月、馬は年３回開かれ、道内外の畜産農家や酪農家が参加している。

15年度の頭数は、肉牛はやや増え、乳牛は横ばいながら、全ての畜種で単価が大幅に上がった。ホクレン帯広支所酪農課は「これ以上ないという値段が毎月更新された」とし、取扱高を頭数で単純に割った平均単価は、この１年で肉牛で20％、乳牛も17％上昇した。黒毛和種の去勢牛で平均80万円を超えた月もあった。

肉牛は黒毛和種やＦ１他の合計で頭数が同６％増の５万3335頭、取扱高は同25％増の256億3399万円。全国的に出荷頭数が減る中で、黒毛和種の繁殖牛の産地は道内にシフトし、枝肉価格も堅調なことが背景にある。

乳牛は頭数が前年度とほぼ同数の１万7828頭、取扱高は同17％増の89億9576万円。和牛との交雑種（Ｆ１他）を産ませるなどで乳牛の出荷頭数が減る一方、道内外の大規模農場は乳牛を増やす意欲が高く需給がひっ迫した。

十勝市場の取扱高の増加は、管内ＪＡ取扱高が初めて3000億円を突破した要因の一つにもなった。ただ、この相場に対して関係者は「十勝には牛を売る人がいれば買う人もいる。折り合いが付く適正な価格で収まるのが好ましい」と、高値更新が続く傾向を懸念する声もある。

同課は「乳牛も肉牛も単価が基本的に下がる要素はない。４月以降も横ばいの状況で、今後も高値で推移するのでは」とみている。